

朗文堂ちいさな勉強会『紙』講座 資料



『紙漉重宝記』

(国立国会図書館 請求番号 特1-3415)

{参考 URL / 朗文堂 花筏}

紙の博物館 — 王子 ミニ展示「紙漉重宝記」

会 期 2018年06月16日[土]

—2019年03月03日[日]

『紙漉重宝記—かみすきちょうほうき』参考：寿岳文章（『国史大辞典』、吉川弘文館）

篤農家、^{くにさきじ へい}国東治兵衛の著書。一卷。寛政十年（1798）刊。

著者の遠祖は豊後国^{わさだ}植田郷（大分市）にいたが、いつのころか同国^{くにさきぐん}国東郡に移って国東を名のり、江戸時代石見国美濃郡遠田村（島根県益田市）に定住した。

治兵衛の生まれたのは元禄の末ごろと思われるが、生没年はつきとめられていない。享保17年（1732）の大飢饉に触発されて、豊後（大分県の大部分）や、備後（広島県の東部）から^{いぐさ}蘭草をとりよせ、^{いむしろ}蘭筵の生産を年間60万枚にのばすなど、殖産家としての業績も多いが、彼の名を後世内外に伝えることとなったのはこの小著。

紙問屋の主人でもあった彼が、名所図絵の画工：丹羽桃溪に挿絵を画かせ、方言もとり入れ、商品となるまでの石見半紙のすべてについて語ったもの。啓蒙的な著述ながら、製紙を図解した最初の書物であり、山村紙すきの苦労も視覚的にしのばれるためか、和紙文献としては最も早く海外に知られ、英・独・仏語による翻訳があとをたたない。本邦でもしばしば翻刻・複製された。『日本科学古典全書』、『製紙印刷研鑽会叢書』などに収められている。

{朗文堂ちいさな勉強会『紙』講座} 受講者資料

訳読協力 / 「平野富二生誕の地」碑建立有志会代表：古谷昌二氏

意訳協力 / {『紙』講座} 講師：原 啓志氏

とろ、草の種類

春生じ、花さく。花の中に
実を生ず。ちいさく六角為
胡麻に似たり。虱に似たり。
花実用立なし。根を用ゆ。
左に図あり。木の象綿木の
ごとし。
山どろ、といふは作らず
自然に生ずるもあり。
これを塵紙等漉う
用ゆ其紙いろ赤くなる
とせるべし。

大豆小豆を作る
時候等し



花しほる、を引ぬき、
五月梅雨の間に干し、
かくいふ之根の大きき
八分位長く午房の
ごとし。石原に出来る
は尺短し。



売買銀巻宛に

かけ目百廿目

安き時は巻宛に

かけ目五百目

あるべし

紙漉一船に壹升ほど入と

心得べし

尤、はいのうにてこし、小桶に入
置、入用程つつかふ。

とろ、草の種乳

大豆小豆を作る
時候等し

春生じ、花さく。花の中に
実を生ず。ちいさく六角為
胡麻に似たり。虱に似たり。
花実用立なし。根を用ゆ。
左に図あり。木の象綿木の
ごとし。
山どろ、といふは作らず
自然に生ずるもあり。
これを塵紙等漉う
用ゆ其紙いろ赤くなる
とせるべし。



花しほる、を引ぬき
五月梅雨の間に干し
かくいふ之根の大きき
八分位長く午房の
ごとし。石原に出来る
は尺短し。

売買銀巻宛

かけ目百廿目

安き時は巻宛

かけ目五百目



ひげ皮をこそげとり、擲く。
其製とろ、汁のごとく
水をさし入る、など、やはら
かに成とせるべし。猶、おげん
あるべし
紙漉一船に壹升ほど入と
心得べし
尤、はいのうにてこし、小桶に入
置、入用程つつかふ。

人麻呂の像

石州美濃郡高角里に鎮座

かみやまに
いねねしまける
我を
かよ
知らずと
いもか
待つ、
あ
なん



○紙漉

三



人麻呂の像

石州美濃郡高角里に鎮座

かみやまに
いねねしまける
我を
かよ
知らずと
いもか
待つ、
あ
なん

○紙漉

三